子どもの安全

けがのリスク想定し防止

0歳から14歳の子どもの死亡原因で一番多いのは次のどれでしょう？

①悪性新生物②心疾患③不慮の事故④脳血管疾患⑤肺炎

安全とはリスクが十分減らされた状態です。リスクとはけがをする可能性です。そのけがのひどさと発生確率をうまく想定すればリスクを科学的に制御することができます。子どもの重大なけがはほとんどが過去の例の再発なのです。リスクを想定して計算し制御すれば再発は防止できるはずです。

2016年12月に日本工業規格 JIS Z 8050「（前略）…子どもの安全の指針」ができました。これは子どもの重大なけがのリスクを減らすための基本原則を述べた国際規格を翻訳してJIS規格としたものです。通称「ガイド50」と言います。この規格には、子どもがなぜけがをしやすいか、けがのリスクとはどんなものか、そのリスクをどのように減らすのかが体系的に書かれています。

子どもは体が小さいだけでなく、急速に成長して次々と新しい能力を身に付け、何にでも挑戦したがる特徴があります。周囲にあるあらゆる「もの」に関心を持ち、その「もの」が持つ危険を知らないまま思いがけない行動をとります。

「もの」の設計者はそれに子どもがどう関わるか、子どもに特有のリスクがあるかは十分検討していないことが多いのです。回転ドアに挟まれたり、遊具で大けがをした事例は、子ども特有の行動によるリスクについて「もの」の設計段階での検討不足と思われます。

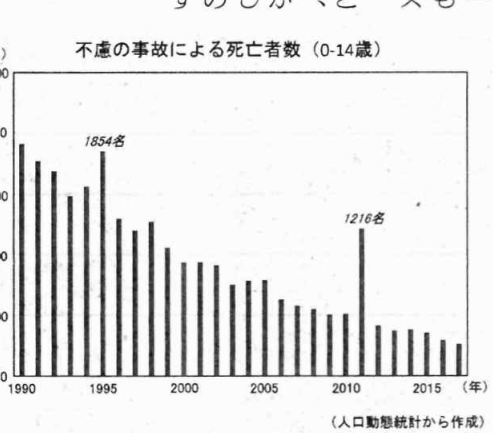
リスクを減らすには「もの」の設計段階で、まず⑴リスク要因を無くす、次に⑵危険に遭うのを防ぐ装置を作る。それでも残るリスクについては⑶使う人にその内容を伝えて、使用段階でリスクを減らす工夫をしてもらう―という三つのステップを踏みます。

子どもが乗ったら落ちるような弱い蓋（ふた）を造っておいて、立ち入り防止の鍵をかけるよう管理者に伝えるという方法で施設を造ったところ、管理者が不用意に鍵を開けてしまい、子どもが乗ったら蓋が壊れて穴に落ちたという重大な事例がありました。

これは⑴⑵のステップをおろそかにして、⑶のステップに頼った失敗です。子どもは何か面白いものを求めて冒険をします。使用段階での管理や注意、目を離さないで―という警告などによる⑶のステップは重要ですが、それに頼って⑴と⑵のステップを飛ばしてはいけません。

上に述べた「もの」には、子どもが危険に遭う要因として「サービス」なども含まれることが「ガイド50」の最新版に登場しました。教育も一種のサービスですが、子どもの成長を図るためあえてリスクに挑戦させることもあり、本来リスク要因が大変多いところです。学校の行事などは、計画段階で子どもが大けがをするリスクを十分に探し出し、三つのステップをその順序で踏んでリスクを減らす対策を考えることが重要です。

「ガイド50」は本来安全規格を作るための指針ですが、子どものけがのリスクを減らすための知恵が体系的に書かれています。子どもが危険にさらされる機会（リスク）は必ずあると考えて、そのリスクを最小にするように、関係する人々が協力できる仕組みをつくることが大切です。「子どもの傷害（けが）の防止は社会全体の責任」と「ガイド50」に書いてあります。この規格が広く普及して子どもの重大なけがの防止に役立つことを願っています。多くの人々の努力により子どもの不慮の事故による死亡は減っていますが、まだまだ減らせると思います。東京消防庁のホームページから「Stop！子どもの事故」という冊子がダウンロードできます。どんな事故が多く、どう防ぐかが書かれていて、とても有用です。



クイズの答えは①②③④⑤（0―14歳、平成29年人口動態統計）で、不慮の事故による死亡が最も多いのです。

（小象の会 元理事、日本技術士会登録「子どもの安全研究グループ」会員 小田部譲）